

千葉県下での2005-06年のハクチョウ群の観察記録

荒尾 稔

113-0021 東京都文京区本駒込4-38-1-505, tmlarao@tml.co.jp

要約

1. 2005-2006年度冬期間に千葉県下には主要な渡来地が2ヶ所から5ヶ所に増加し、例年の倍数近い1,800羽以上が渡来した。
2. 近來にない大雪が北陸、特に新潟県を襲った結果、日本海側の新潟県の瓢湖やその周辺から太平洋側へハクチョウ群の大規模な移動が生じたと考えられる。
3. 今回の大移動は、かつて昭和34~35年度のハクチョウ群(殆どオオハクチョウ)の本州への南下に匹敵する新たな動きとして、大きな変化を引き起こす移動であった可能性が高い。
4. 千葉県では、各所にハクチョウ群の越冬地が形成され、個体数が著しく拡大しており、過去の東北6県や新潟等県での個体数増加の経過から、千葉県ではこのことにどのように相対すべきかを真剣に考えるべき段階に至ったと思われる。
5. 千葉県下で2005-2006年度に越冬したハクチョウ群には、明らかに生活習慣を異にする2つのタイプの群があったと考えられる。第一は餌付け依存型の個体群で、本埜村周辺で越冬する主にコハクチョウ、第二は2005-2006年度に初めて千葉県各地に渡来した餌付け等に依存しない主にコハクチョウ群である。
6. 現在関東地方に、大規模な「ガン・カモ・ハクチョウ」越冬地の形成を意図してる。宮城県伊豆沼や蕪栗沼を第1局、関東地方・利根川下流域を第2局と考える。

はじめに

2005-06年に関東地方でハクチョウ群が著しく増加したが、千葉県下でのハクチョウ群の観察記録を中核として、これらハクチョウ群(主としてコハクチョウ)の増加について報告する。

I. 千葉県内へのハクチョウ類渡来状況

環境省生物多様センターの承諾後、「ガンカモ科鳥類の全国調査」2006年1月調査結果のうち2005-06年の渡来情報を千葉県自然保護課鳥獣管理室対策課より公開して頂いた。なお、調査は2006年1月15日、調査時間は午前10時~午後4時前後までである。

(1) 東庄町夏目の堰への渡来は初めてではなく、前年度までも時折4~6羽が渡来越冬していたとの話である(東庄県民の森・金子福雄)。また、昼間ハクチョウ群は殆ど採餌のために遠方まで飛び去り、昼間の調査では、堰周辺に残った一部の個体数だけが数えられる。

(2) 栗山川の個体群の時は、夏目の堰と考えられている。

(3) その他「ガンカモ科鳥類の全国調査」以外のデータ(荒尾の観察)では、

① 印旛沼栄町：1月18日に新海秀次さんの水田のハクチョウ群(300+羽)は、本埜村の個体群と密接な関係があり、昼間本埜村の個体群の一部が飛来して、水田で採餌していた。1月末からは最大500羽が昼間採餌し、本埜村のハクチョウ群の採餌場、避難場所として利用されていた。その後相当数が夜間も埜として使用し始めたとのことである。

② 江戸川河口にコハクチョウ3羽(町作りサポートセンター・栗原裕治)。

③ 浦安市行徳でコハクチョウ10羽(行徳野鳥観察舎友の会・佐藤達夫)。

II. 関東地方での2005-06年のガン・ハクチョウの移動と大寒波とエポック

1. 東京都・小笠原諸島への渡来

小笠原諸島に飛来したコハクチョウ家族群のことが新聞で紹介された。これについて、まず新潟県瓢湖周辺から太平洋側へ移動したと仮定して、コースを推測してみた。

小笠原諸島で4羽と12羽の2群が観察された。このうちの家族4羽のうち2羽が保護されたが、衰弱していたこともあり、飛行機で東京に運ばれ、最終的には福島県楢葉町の大堤にて放鳥された(楢葉町・佐久間拓城)。

2. 関東地方における状況

現在までに収集した関東全域での情報から、2005-06年に関東地方各地にハクチョウ群の新たな埜が形成されましたことが明らかになった。

2006年1月末現在では、千葉県下には、コハクチョウを中心にして印旛沼本埜村周辺に1,350羽以上、九十九里、銚子に近い東庄町の夏目の堰に約400羽が渡来した。千葉県下では、この2ヶ所だけで1,750羽前後の渡来数であった。このうち本埜村のハクチョウ群は1,050羽で、残り300羽が2006年1月に入って追加的に渡来した個体数である、1月の増加は、東北地方の寒波に追われての飛来なのか、または他の越冬地からの移動個体なのかは現在不明である。

そこで、今回は、「2006新潟豪雪」と呼ばれる事態を、どのように考えていくべきかについて情報を



図1. コハクチョウの小笠原諸島への飛来。

について情報を整理していくつかの考え方を述べる。

(1) 静岡県豊橋にも、コハクチョウ30羽以上の埒が形成された。豊橋と田原の市境近く(三河港大橋田原側近く)で1月上旬から、ロシア方面より越冬のため日本へ来る事で知られる白い冬鳥「コハクチョウ」が30羽以上まとまって渡来。近年では04年冬以降、豊橋市の神野新田町や田原市の汐川干潟でも数羽単位で観察された。最近、吉田城跡下の豊川内で12羽が目撃されるなどの話題もあった(東海日日新聞, 2006年1月13日)。この静岡県あたりから太平洋に飛びだした、一部の個体が風に乗って、何とか小笠原諸島にたどりつけたのではないかと考えられる。

(2) 東京都杉並区・善福寺公園にコハクチョウ6羽が飛来したが、これまで都内23区に個体群として渡来・越冬した例は過去になかった。

(3) 千葉県東庄町夏目の堰に400羽ものコハクチョウの大きな埒が突然出現し、地域でびっくりしていた。前述の太平洋に飛びだした群れの一部も、気がついてあわてて九十九里へと戻るか、舞い降りたのかも知れない。でも相当数はそのまま太平洋に飛びだした可能性が高いと考えられる。

(4) 埼玉県では、「ガンカモ科鳥類の全国調査」で2005-06年の県内コハクチョウ総数が、昨年度の136羽から363羽へと、2.5倍以上激増した。旧川本町の上流域の越辺川と飯森河野合流点の川下地区に新たな埒が形成されたそうである(埼玉県生態系協会・堂本)。

(5) 茨城県土浦市霞ヶ浦湖畔の蓮田に、コハクチョウを主体とした100+羽の群れが、突然渡来し、定着した。ここには、以前から10+羽のコブコハクチョウが冬期に渡ってきて越冬していた場所である。

(6) 栃木県大田原市内的那珂川流域に、100羽ほどの新たな埒が形成され、同時に栃木県内では、至るところで4~8羽単位(家族と思われる)でコハクチョウが渡来定着しているという状況である(福島県環境生活部環境政策室・大槻晃太)。

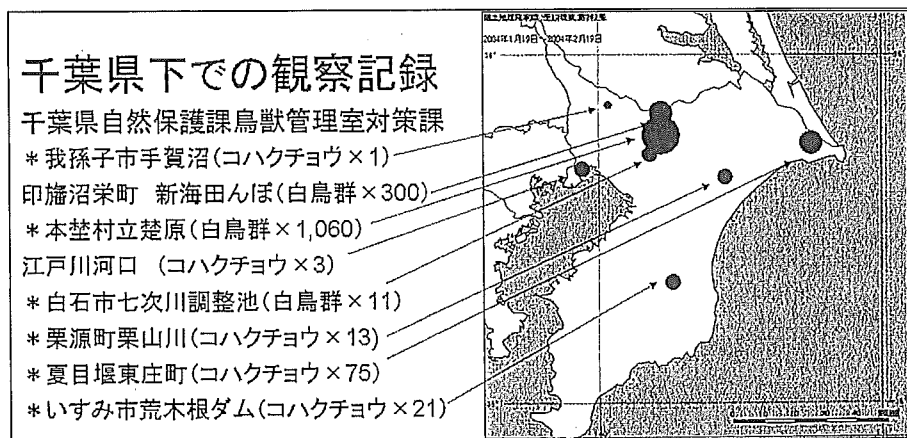


図2. 千葉県下でのコハクチョウ観察記録。

Ⅲ 新潟県等からのコハクチョウ群移動の推測と分析

ハクチョウ群の日本海側から太平洋側への大規模な移動が生じたと考えられる。ちょうど、2005年12月の異常寒波と季節はずれの新潟豪雪(12月)等があり、新潟県の瓢湖やその周辺から、寒波と結氷のため1,000~2,000羽以上の群れが、一気に太平洋側へ移動した可能性が高いと思われる。その根拠として、新潟県では2004年1月のデータではオオハクチョウ・コハクチョウを合わせて15,000羽をゆうに超す個体群が生息していることが分かっている。ちなみに東北6県では軒並み10,000羽、あるいはそれ以上のハクチョウ群が越冬しており、何らかの理由で飢餓等を生じる事態に陥った折には、大きな個体群単位での移動を引き起こす可能性が、特に餌付けがなされていない個体群を中心に今後とも生じる可能性があると思われる。

(1)東北6県では、ハクチョウ群の個体数が増加し、各県それぞれ10,000羽に近いか、それ以上となっている。2005年12月に季節はずれの大雪が北陸、特に新潟県を襲った。この季節はずれのドカ雪と異常な寒波のため、大量のコハクチョウが餌場と埒の両方を奪われたのではないかと指摘されている。その結果、2005年12月の末から1月にかけて日本海側から小さな群れ単位で栃木、茨城、東京、千葉へと飛来した可能性が高い。その一群が長野県経由で奥秩父を越え、東京都あきる野市でも目撃され、多摩川沿いに下って杉並区善福寺公園(6羽定着)や東京港野鳥公園等に飛来した。

長野県では、例年の倍以上が安曇野に渡来(1,060羽→2,300羽)した。

栃木県や茨城県でも、新しい越冬地に100羽単位で飛来し、各地に定着した。

(2)その過程で、移動ルートとして、2つのケース、A群とB群の存在が想定される。A群は阿賀野川を遡って、栃木県の内陸部へルートを移動した。栃木県では家族単位で分散飛来したケースが多いと聞いており、那珂川の中流域にも100羽が、さら

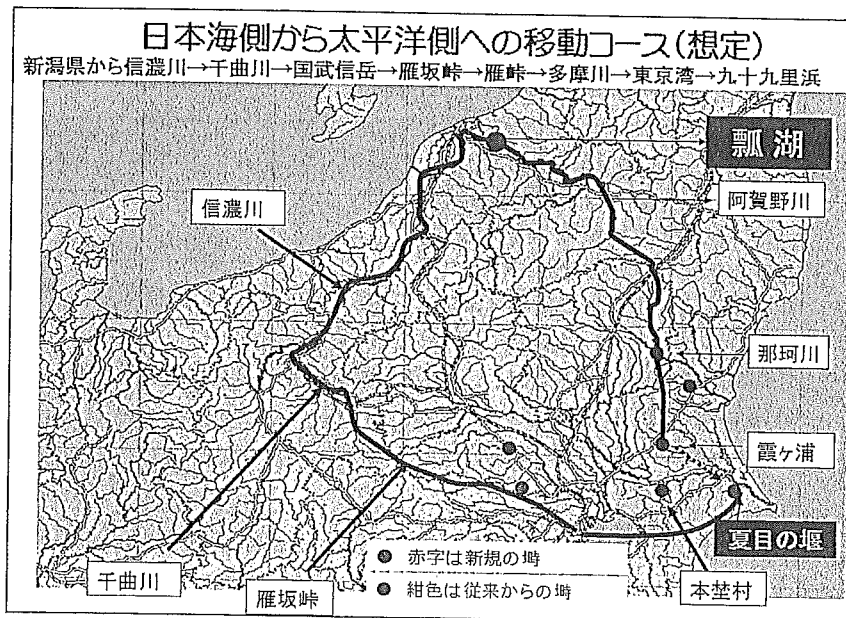


図3. 日本海側から太平洋側への想定される移動コース。

に茨城県の土浦市にも100+羽の一群が渡来したケースがあった。この群れの一部が千葉県の九十九里まで到達したことも想定もさる。(3) B群は、瓢湖等から信濃川沿いに上流域に移動した群れである。長野県で二つに分かれ、B1群は安曇野で先の渡来していた越冬個体群に合流した。その結果、安曇野で越冬したコハクチョウの個体数が、前年度の1,035羽から2,398羽(渡来最大数)と倍以上に激増した。増加した個体群は、そのままその地で越冬したが、埒の場所も異なり、いままでの餌付けされた個体群とは行動パターンが大きく異なり、自立した採餌行動により、この地域のムギ畑へ大群で入り込んで、地域で初めてムギの食害問題を引き起こしたそうである。

(4) もう一つのB2群は善光寺平野から千曲川沿いに移動し、その源流部である山梨県甲武信ヶ岳を越えて雁坂峠、雁峠を経て、さらに多摩川源流を下って東京湾を横断し、九十九里に出たものと推定される。東京都と神奈川県の間を流れる多摩川では、一部は12月20日頃から源流域に近い秋川と多摩川の合流付近で相次ぎ目撃された。自然観察指導員東京連絡会(NACOT)のMLでも「この冬は多摩川では珍しくハクチョウの目撃情報が多く、先月19日に秋川合流点近くで14羽が確認され(朝日新聞)、30日にも十数羽が通過したそうです。」というコハクチョウの目撃情報が流れた。1羽は秋川と多摩川の合流点付近に定着し、6羽は杉並区の善福寺公園、数羽が東京都野鳥公園に渡来した。

(5) さらに可能性としては、B3群が雁坂峠、雁峠を飛び越え、そのまま南下を続けると。「雁の腹播り岳」を越えて静岡方面に南下が可能である。この群れがそのまま太平洋に飛びだして一部は小笠原へ、あるいは千葉県の九十九里へと飛来した可能性も考えられる。

IV. 昭和34~35年のハクチョウ類の大移動と対比

私は昭和34~35年のハクチョウ類の大移動をつぶさに経験している(ちょうど高度成長の始まる直前)。2005年冬の状況は45年ぶりの移動第2弾と考えている。

今回の移動の特徴と規模は、日本海側から太平洋側への大規模移動である。その点で、かつて昭和34~35年のハクチョウ群(殆どオオハクチョウ)の本州への南下に匹敵する大きな変動を伴う移動であった可能性が高いと感じている。

(1) 大豪雪地帯に巨大な規模でハクチョウ群が越冬。2005-06年の冬に新潟県では優に15,000羽を数えた。東北6県では平均各10,000羽として、新潟県を加えると合計75,000羽以上である。このような数のハクチョウが豪雪地帯の人里に集団で越冬している箇所は、世界中でも稀な地域だと考えられる。その多くの個体にとって、真冬に採餌出来る環境が無いに近い場所も多く、人の餌付けに依存して生存していると言って過言ではない。

事例としては、福島県では渡来地65ヶ所(約10,000羽)のうちで、餌付けなしの箇所は1ヶ所だけとの報告であった(前福島県環境生活部環境政策室・大槻晃太)。でも、流れが着実に変わりつつあり、野生に戻った(生活の自立化)ハクチョウ個体群が日本海側で着実に増えていると認識している。

(2)新潟県・瓢湖での餌付け打ち切りの結果、新潟県瓢湖における餌付けの実質的な中止も大きいと思われる。新潟県では、特にコハクチョウの増加が著しく、生息環境が過密状態に陥っていたとも考えられる。例えば、新潟県阿賀野市の瓢湖では2005年12月20日以降約1,300羽のコハクチョウが減少して、飛び先不明になったとのことである。ここでは、多くのコハクチョウが埒としてのみ利用し、早朝飛びだして幅広く阿賀野市周辺域の水田地帯で採餌し、夜遅く埒へ帰ってくる。2005年12月の今回の大

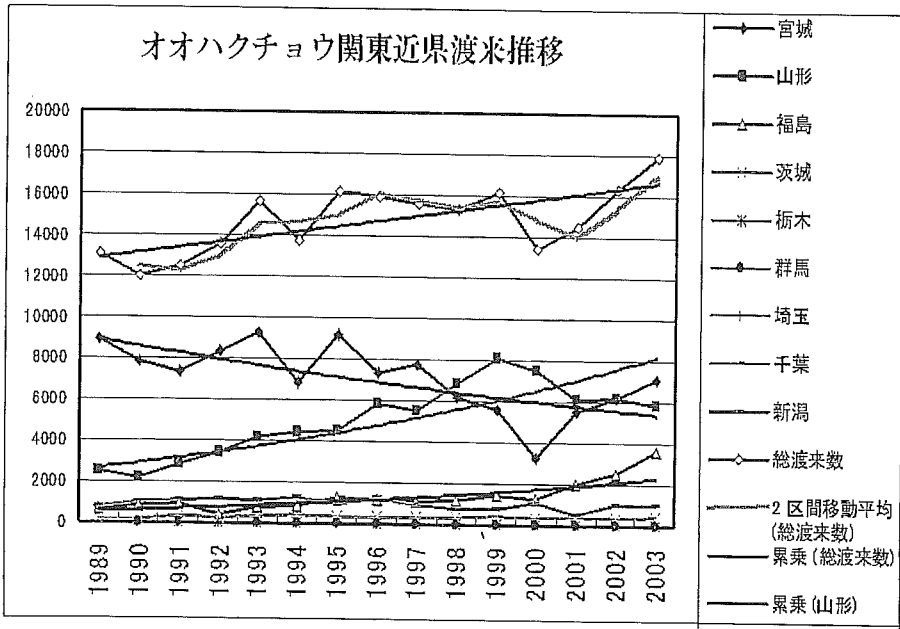


図4. 関東地方とその近県におけるオオハクチョウ渡来数の推移。2003年のデータは荒尾が当該各県の担当者からの非公式聞き取り情報である。

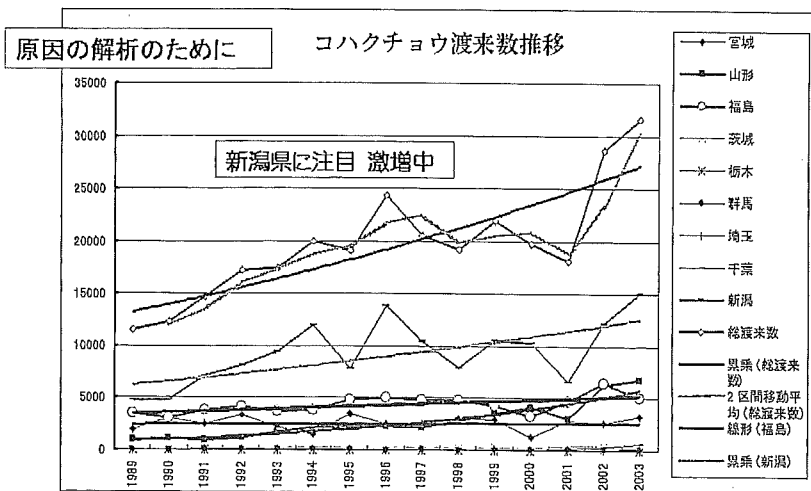


図5. 関東地方とその近県におけるコハクチョウ渡来数の推移。2003年のデータは荒尾が当該各県の担当者からの非公式聞き取り情報である。

寒波と大豪雪は、餌付けに依存しない個体群に大きな影響を与えたと思われる。結果として餌場と休息地を失い、生存を脅かされて危機に陥ったハクチョウの個体群を新たな越冬地を探させるという行為に走らせ、一気に移動を開始したと言うイメージかと考えられる。これは一過性なのか、それとも今後とも継続される動向なのかは、現時点では不明である。しかし、今後とも個体群密度の高さが影響して、新たな越冬地を探そうという動機付けが若鳥主体の家族群に生じているとも考えられる。

これから毎年、家族群(両親と非繁殖亜成鳥と当歳の幼鳥で構成される?)単位での冒険旅行が続々と繰り返される可能性が高いと考えられる。

V. 自立を目指しているハクチョウ群の成立

2005-06年に越冬したハクチョウ群には、明らかに生活習慣を異にする二つのタイプがあると考えられる。

その一つは、餌付けに高度に依存した従来からの渡来群で、主に本埜村周辺で越冬している。主体はコハクチョウである。その二は、2005-06年に初めて大量に千葉県各地に渡来した餌付けに依存しない、人間への依存から脱却したハクチョウ群である。こちらもコハクチョウである。

この現象は千葉県に限らず、東京都や長野県安曇野に渡来した個体群でも観察され、その社会的な現象に新たな評価が必要だと考える。特に、ハクチョウ群における「餌付け」問題への解答策を考える上で、重要な示唆を与えてくれていると考えられる。

1. 従前より「楢葉の白鳥」という名称で餌付けされたハクチョウの個体群をどのように考え、対処すべきかを発表してた。餌付けは、ハクチョウやカモの保護を考えた上で避けて通れない大きな課題である。

(1)ハクチョウ群にとって、人によって餌付けされると言うことは、自己と子どもを含め、人に大事な自分の命を託す行為となる。まず、餌付けによって餌を担保され

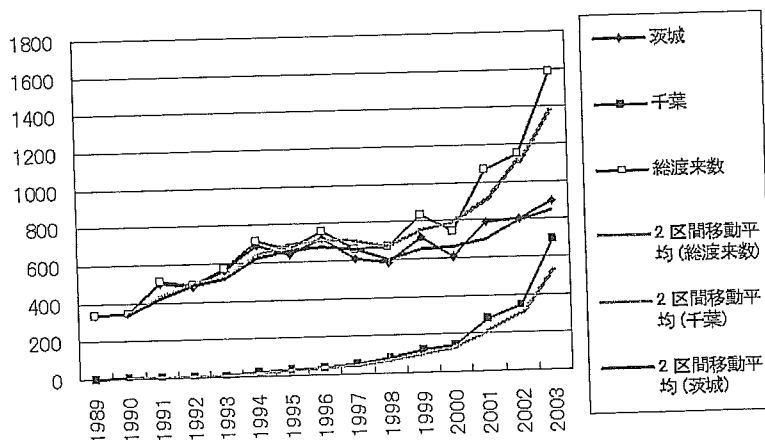


図6. 千葉・茨城両県におけるオオハクチョウとコハクチョウの渡来数の推移。

たハクチョウの親は、結果として、子どもに何も教える必要が無くなり、教えることを放棄することになってしまう。1日中遊んで、ぶらぶら餌を待って3食昼寝状態で冬を過ごすことになる。従って、生存率が高く、幼鳥が親になる確率が高く、しかも栄養満点で体力があるので、たくさん子供を産むであろう。

(2)コハクチョウのように年10%を越す勢いで現在でも増え続けている。しかも子どもが親になって、たくさんの子供を産み育てる。複利計算で増えることになる。まさにネズミ算の世界と話している。

(3)しかも野生状態より10年程度から18年程度まで寿命が延びてしまうと言われている。

2. 餌付けはハクチョウの生きるための文化を壊す。餌付けとはハクチョウでも人でも同じで、親子でも学校でも、生きるための方法を教えることが放棄され、文化の喪失をもたらすと考えられてきている。人間に何から何まで、命までをも託してしまい、冬の期間日本を故郷とするハクチョウに生じた独自の行動を「ハクチョウの文化喪失」として捉え、それを「楢葉の白鳥」現象として定義した。

3. 餌付けを少し宛止める箇所が増えている。ここ4～5年、日本海側でも東北地方でも、少し宛ハクチョウに餌を与えなくなってきている。その中で、(人を横目で見ながら餌を貰えないなら自分で探すか?)自立したハクチョウ群が少し宛出てきている。このハクチョウ群は、人間とは距離を置き、自立を果たした群れと理解している。人間の行動を観察し、餌をくれないなら、しょうがない自分で探すか、で始まった模様で、餌付けに依存しない個体群である。

4. 新潟県・瓢湖のハクチョウ群には特異性がある。瓢湖を埒にする個体群では、自立行動は顕著となっている。そこでは同時に家族単位での分散化がどんどん進み、瓢湖の周辺域には家族単位と思われる小群があちこちに見られる。

瓢湖では、いままで大きな節目が2回あった。

(1)かつて故・吉川老人がハクチョウの餌付けに成功した。北海道からの渡りのルートに沿って餌付けされ、人を恐れなくなった個体群がいたところで餌付くことになった。

(2)現在、瓢湖はハクチョウ群の埒であって、餌付けは自粛されている。かつて、急な餌付け中止のために一部混乱が生じたと聞いている。結果として一番懲りたのはハクチョウ達で、人と距離を置き出したと聞いている。早朝に埒を飛びたち、家族単位で1日中近在で採餌し、夕方遅く埒に戻る。現在、瓢湖のハクチョウ群はこのような家族群が主体となっているようである。

5. 千葉県夏目の堰の個体群はどこから

(1)千葉県九十九里・東庄町の「夏目の堰」では、昨年12月末より突然大挙してハクチョウが渡来してきた。渡来数は350羽以上とも言われている。この群れがどこから来たのか。有力な説は、日本海側の新潟県下越地方の瓢湖と考えられている。

(2)千葉県下、特に夏目の堰に渡来したハクチョウ群は、特徴として、早朝全部が一斉に飛びたち、高く舞い上がって、昼間はほとんど姿が見られない。幅広く九十九里方面を探索して餌を探して、夕方遅く、高い空から家族群単位で、三々五々帰着する。完全に自立した群れと報告されている。この行動様式は、瓢湖のコハクチョウと実によく似ている。瓢湖管理事務所の担当者の電話での話では、千葉県夏目の堰の話をしたところ「うちのコハクチョウだ!」とみじくも言われたのとも符合している。瓢湖発は、ひとつの有力な渡来地情報ともなってきた。

(3)夏目の堰の個体群は、餌付けされた千葉県印旛郡本埜村の群れとは明らかに行動が異なっており、殆ど餌付けを期待しない野生群として評価されている。

VI. 千葉県のハクチョウ群の新規渡来地

1. ハクチョウ群では餌付け個体群と野生個体群の間には、上述のように明らかに行動の違いが見られる。同じ行動パターンが、長野県安曇野の個体群や善福寺公園などでも観察されている。

人間の行動を観察していても、餌を自分で探すことで、人からの餌付けには依存していない。(与えられた餌はほどほどに食べるが、時間が来たら採餌に出る)。

ハクチョウは人間より短命であり、ほぼ犬と同じ(ドックイヤー)でもある。

日本へ渡来する渡り鳥達は、日本の文化環境にどっぷり浸かって多様な影響を受ける。餌付けによるハクチョウの文化の喪失も、その一つであった。

日本人の陥った「戦後文化の罟」からいち早く脱出するすべを学習できた新しい世

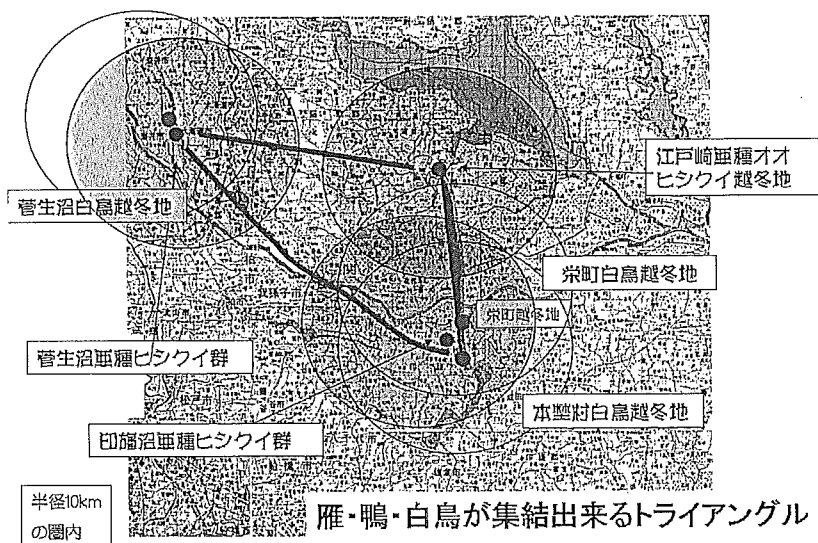


図7. ガン・ハクチョウ類の大規模越冬地のラインを形成。渡り鳥のための第2極形成のためのマスタープラン。

代が誕生したと考えられる。日本での市民達のこれからの行動パターンを先駆的に表現する役割を担うと考えられる。日本の子ども達にも見られる「子ども文化の崩壊→」となぞらえてみて、なにも餌付けからの自立は、ハクチョウの問題と言うより、今の日本人が墜ちいつている文化そのものとの共通性を強く感じる。

ちなみに、「学習」とは、白い羽の鳥から、ハクチョウの家族むつまじい様を学ぶということだと、中国の漢字に詳しい教育学者からアドバイスを受けた。

VII. 関東地方へ渡り鳥(ガン・カモ・ハクチョウ類)の第2局の大規模越冬地形成

1. 日本の水鳥の現状を分析し、千葉県での対応策を考えると、

(1) 宮城県ではマガン等の越冬個体が激増し、一部では地域への過重な負荷、集団感染による大きな被害予想などから、現在の個体数は限界に近いと考えられているため、分散化が急務となっている。

(2) 利根川下流域の大型水鳥を絶滅させている。地域の自然と文化の再興、特に自然の再生が重要になる。関東地方、特に千葉・茨城県地域での、明治時代以降の乱獲や湿地の減少が取りあげられる。大陸から渡来して関東地方で越冬していた多くの種類の個体群が絶滅し、残った種類も大きく減少し、いまだ回復の兆しが見えてこないところに、現在日本の直面している問題点がある。特に過去の歴史と経過から、再生が可能である。その類はトキ、コウノトリ、タンチョウなどのツル類、ガン・カモ・ハクチョウ類等枚挙にいとまがない。

千葉県で言えば海岸の湿地の90%を埋め立てて工業地帯や住宅等に、さらに千葉県・茨城県の陸の湿地の89%(宮城県に次いで2,3位)を埋め立て乾田化した水田や畑に変えてしまった経過から、地政学的に水郷地帯を失っている。

(3) 東アジア圏では、水鳥等渡り鳥の個体数が、ヨーロッパ・アフリカ個体群、南北両アメリカ個体群の1/3以下である。その回復には、かつての越冬地の再生が欠かせない。

(4) アジア、特に中国の「高度経済成長」路線で生じる湿地等の環境破壊に対して、日本の、特に千葉県での新たな生息地の再生確保という形で、世界規模での生態系保全の役割を担うことにある。

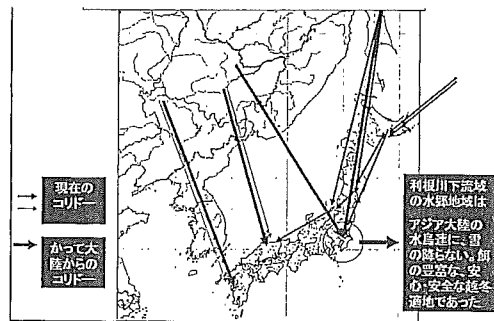


図8. 利根川下流域における地政学的な位置付け。大型水鳥の渡り道。

VI. 千葉県内でのハクチョウ群の個体数変動が予想される

1. 千葉県各所に越冬地が形成され、ハクチョウ群でも特にコハクチョウの個体数が著しく増大した。千葉県全域へのハクチョウ類の渡来・越冬数は、2005-06年には1,800羽以上であった。

どのようにして、これから相対すべきかを真剣に考えるべき段階に至ったと思われる。現状から未来を想定すると、千葉県下のハクチョウ群は膨張し、いよいよ雪だるまで増加する段階が間近に迫っていると推測される。予想値としては

2005-06年 1,500羽の予想の所、実際は1,800羽以上になった

2006-07年 2,000羽以上に増加

2007-08年 2,500羽以上に膨張の可能性が高い。5,000羽突破も時間の問題だと考えて良い状況とまで言える。

2. 餌付けは最低レベルまで落とすことが、今後必要とされている。

(1)でも現状では印旛郡本埜村周辺では、環境がこの個体群を自然のままの状態を支えていける状況にないが、給餌を朝の1回目を打ち切り、夕方の2回目も絶対量を制限して頂くようお願いしている。

(2)2004-05年には、そのために朝のうちに周辺の水田に多数が移動し、自立して採餌を開始していたが、12月初めには周辺域にある餌場を食い尽くしてしまった事が分かった。以後の期間は従来通り餌付けざるを得なかった。2005-06年には渡来した約1,350羽のうち500羽程度は周辺の水田で採餌を始めている。

(3)印旛沼・手賀沼に限定して考えて見ると 陸ガモ類の群れが減少し続けている。これは冬期間に、カモ類の餌が確保出来ていないことを伺わせる。

渡り鳥として飛来した陸ガモ群は、印旛沼でも手賀沼でも全域がほぼ圃場整備され、冬期に乾田化し、印旛沼本埜村周辺での調査ではほぼ90%までが、特に秋に稲刈り直後に耕起してしまう習慣が定着している。このために、ハクチョウ類やガンやカモの餌である落ち穂や2番穂が、梳き込まれてしまい、餌となることがない。餌が乏しい、ある時期には何もなくなることが原因で、特に越冬するカモの群れは、栄養状態が悪く、ここ数年親の死亡率を補えない状況と推測される。

(4)殆どの地域で圃場地域内でも銃猟ができる。また乾田化のために餌場が消滅しているなかで、冬期に水を張った水田が散見されるが、これが殆ど米を撒いた「無双

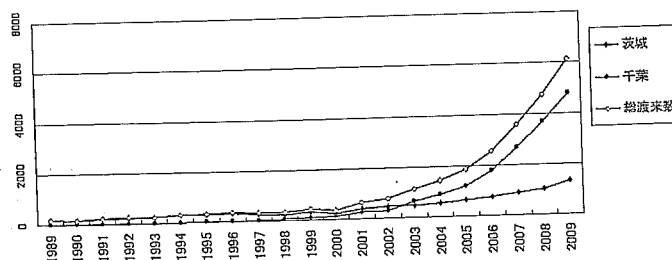


図9. 茨城・千葉両県におけるコハクチョウ予想渡来数。

網」猟の現場である。

年間で膨大な数の陸ガモが、餌場を求めて無双網で一網打尽に捕獲されてしまう。これは許可を得て、合法的な狩猟方法でもあります。従って、どんどん渡来数が減少しており、後2～3年で殆ど見ることが出来ない状態にまで落ちこみそうである。

(5)かつて50年前には、印旛沼や手賀沼で水面を真っ黒に染めていた数万羽もの潜水ガモ群(キンクロハジロやホシハジロ等)は、両湖ともほぼ渡来数ゼロとなっている。

(6)ただ、茨城県霞ヶ浦では、マガモやコガモ、ヒドリガモなど陸ガモが急増している。それは、少なからず湖岸の自然再生事業が随所で行われていることやハス田の存在が大きい様である。特に土浦市、霞ヶ浦市の湖岸では、アサザ基金を含めた行政との協働によるアサザ復活の動きで、湖岸の沖合に防波のための粗朶帯ができていまる。この粗朶による防波帯及びその内側の静謐な環境が埒となり、湖岸と斜面林までの一帯が休耕田対策として蓮田となり、年間餌が豊富に確保されることとなった。また、アイガモ農法でアヒルの餌とされるアドラー(オオアカウキクサ等)が異常に繁殖し、陸ガモの格好の餌になった事も大きい様である。しかし逆に大きな課題(例として鳥害防除網設置によるあらゆる鳥を殺す事態)を生じてしまっている。印旛沼や手賀沼とは両極端な状況にある。

3. 関東地方に大規模な「ガン・カモ・ハクチョウ」第2局の越冬地の形成を意図する。その観点から、ハクチョウ、ガン類、そして同時にカモ類の動向も含めて考えて

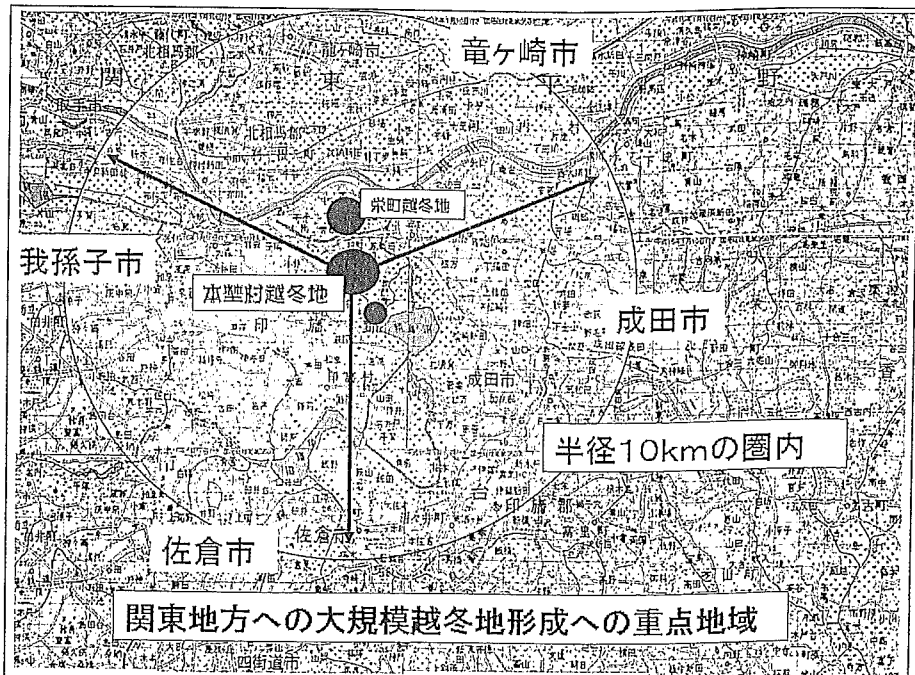


図10. 関東地方における大規模越冬地形成の重点地域。

みようと考える。渡り鳥のための第2極を形成のためのマスタープランとして、まずガン・カモ・ハクチョウ類が集結出来る場所と条件を考えてみた。

4・農家の皆様をお願いするシオリ。少なくとも50年以上の水田は、ガン・カモ・ハクチョウ類に無尽蔵に餌を与えてくれた。

(1) ガン・カモ・ハクチョウ類の越冬地には、冬水たんぼが何ヶ所か欲しいと思う。水田のひこばえ、二番穂を、渡り鳥に分けて頂きたい。

(2) 関東地方では、全域に及ぶ圃場整備の結果、ほとんどの水田が見事に乾田化されてしまった。しかもイネの刈り入れ直後に耕起してしまう習慣が定着している。

(3) 乾田化と秋の耕起によって、ガン・カモ・ハクチョウ類にとって、関東地方にはまともな餌場がない状況になっている。

(4) そこで、最小限の要素としてイネの根と地中の茎の部分が大切だと分かってきた。冬期湛水水田で水を少し与えた耕起されていないイネの根はみずみずしく真っ白で、6月頃まで生きていまる。

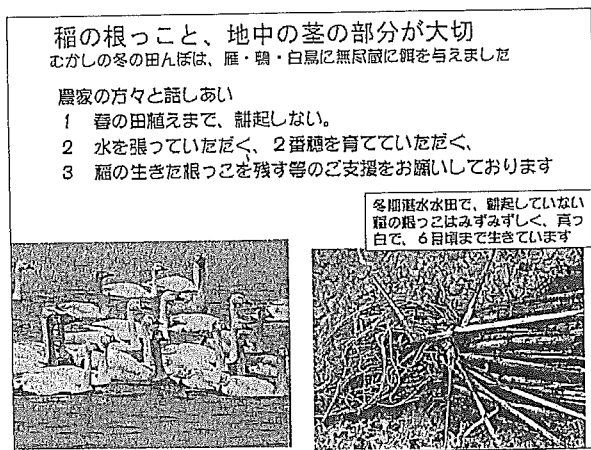


図11. 越冬期の餌条件の改善策。

5. 農家の皆様へのお願い

- ①春の田植えまで、耕起しないをしないでいただけないか。
- ②水田に水を張っていただき、さらに2番穂を育てていただけないか。
- ③イネの生きた根を残す等のご支援をお願いしていることである。

終わりにあたり、この資料作成で以下の皆様にご教示、資料提供を頂きました。このお礼申し上げます。新潟県阿賀野市瓢湖管理事務所、千葉県自然保護課鳥獣管理室対策課、福島県環境生活部環境政策室・大槻晃太氏、埼玉県自然保護協会、アルプス白鳥の会、日本野鳥の会東京支部・川内博氏、千葉県自然保護課鳥獣管理室対策課、環境省生物多様センター。